古代アメリカ学会会報

第 36 号

ペルー、プーノ、クティンボのチュルパ　©清家大樹

目次

◆会員からの寄稿　1
◆特集：古代への接近法　2
◆第 3 回東日本部会研究懇談会の報告　9
◆公開フォーラム・国際シンポジウムの報告　10
◆高校世界史教科書改訂に関する報告　15
◆事務局からのお知らせ　16
◆編集後記　19

2014 年 6 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会員からの寄稿

メキシコの大学で人類学を学ぼう！

嘉幡茂（ラス・アメリカス・プエブラ大学）

ラス・アメリカス・プエブラ大学（Universidad de las Américas Puebla、以下 UDLAP と略称）は、メキシコ合衆国プエブラ州チョルーラ市に位置する。メキシコ国内で名門私学として名が通り、世界各国から学生が集まっている。また、愛知県立大学、同志社大学、関西外国語大学とも協定を結んでおり、日本人学生もこの大学に留学している。

このコラムでは、将来メキシコで、スペイン語だけでなく人類学・考古学を学ぼうと考える方に対して、UDLAP ではどのような授業が行われているのかについて紹介したい。筆者が籍を置く社会科学部・人類学科には、筆者を含め 7 名の専任教員と数名の非常勤講師がおり、各教員の専門知識を考慮し、授業が割り振られる。ちなみに授業は 1 コマ 150 分である。

ご存知のように、メキシコを含め欧米では、人類学は文化人類学、考古学、言語学、形質人類学から成り立っている。将来的に研究者として成長するには、例え文化人類学を専門にするにせよ、その他の分野の基礎知識や方法論を知っておく必要がある。そのため、この学科に在籍する学生は、これら 4 分野の基礎講義を入学から 2 年の間で履修し、単位を修得し終える必要がある。「人類学基礎理論」「考古学入門」「言語学入門」「形質人類学入門」はもとより、「統計学」「先史学」「ナワトル語と文化」「歴史民族学」など多岐にわたる。一風変わった講義には、「持続可能な開発のための倫理」が挙げられる。自分の研究が社会に貢献できるものでなければならず、同時に、研究は社会からの信頼や信用の上で成立していることを叩き込まれる。

これらの単位を修得した後、より専門性の高い分野の講義を履修することが許される。以下では、筆者が考古学を専門とするため、この専門分野について述べていきたい。

考古学の場合、教室で行われる講義の他、フィールドに出て調査技術や方法論を学ぶ「実践考古学」「地形測量」「考古学実習」などがある。この中でも、まず「実践考古学」の授業は重要だ。メキシコではこれに相当する授業単位を修得していないと、他の考古学調査には参加できないという決まりがあるためである。表面採集調査や発掘調査で必要な基礎技術を学ぶ。試掘トレンチの設置方法、層位学的発掘方法、実測方法、写真記録方法、GPS による記録などが主である。これを修得した学生は、「考古学実習」を履修することができる。フィールド調査をより体系的に学ぶ授業である。学内では「遺物分析方法」「メソアメリカ考古学」「先史時代の芸術と建築」「考古学セミナー」などの講義を受け、最後に卒業論文を作成する資格を得ることができる。

しかし、単位を取ることは容易ではない。授業ごとに読んでこないといけない論文数やレポート提出回数の多さが挙げられるが、同時にレポートの質も当然評価対象となるからである。

一方、学士号を勝ち取ることも容易ではない。まず、メキシコには学生にとって面倒な制度がある。「社会サービス制度」と呼ばれ、UDLAP では学士号取得の条件として、480 時間の社会労働が課される。例えば考古学専攻の学生の場合、どこかの考古学プロジェクトに参加し無償で働かないといけない。そして、平均 200 頁（レターサイズ）の卒業論文の作成である。これらをクリアできず、単位取得退学状態（pasante: パサンテ）にいる学生も少なくない。

私たち外国人にとっては、更に大きなハンディーキャップが課される。母国語ではない言語で学位を取ると言うことである。おすすめは、UDLAP の国際交流室を介して、語学留学期間中に人類学科で講義を履修することである。しかし、それでも専門分野の授業についていくのは容易ではない。

母国語以外で専門分野の授業を受けた経験のない方には、この困難さが充分に伝わらないかもしれない。一つエピソードをお伝えしたい。筆者は愛知県立大学・修士課程在籍時に、1 学期ながらこの学科に留学していた。履修時に、折角の機会だから沢山講義を受けようと欲を出し、3 コマ履修したのが誤りだった。14 年前の「魔の木曜日」のことは今でも忘れることができない。それは、この日には 2 コマの講義「先史時代の芸術と建築」「考古学理論」が重なっていたためである。スペイン語と英語の読解に堪能でなかった当時、授業で落ちこぼれないため、ページ数の多い指定論文を熟読し、要点をまとめると既に夜が明けていた。そして、先生の説明や学生たちの議論を理解するため、授業中もかなりの緊張を強いられていた。20 時 30 分に 2 コマ目の授業が

終了しアパートに帰る道中は、疲労がピークに達し、吐きながら夜道をトボトボと行ったものだ。

苦難をものともせず、メソアメリカ地域の人類学者を目指す方々！UDLAP でお待ちしております。

特集：古代への接近法

古代アメリカ学会には、南北アメリカ先史学・考古学・歴史学だけでなく、その関連分野を専門とする研究者が多く在籍しています。今回の特集はその中でも現代の食文化、観光、牧畜をフィールドに活躍されている 3 名の会員に寄稿いただきました。近接諸分野の研究者が集まる本学会ならではの、身近で馴染み深い諸問題が描かれています。これらの研究が試みる「古代アメリカ」への示唆に富んだアプローチによって、会員同士の意見交換がさらに進むことを期待したいとおもいます。

●低投入型農業によるペルートマト増産の研究

沼田晃一（関西外国語大学短期大学部）

トマトの原産国はペルーである。筆者は 25 年にわたり、ペルーでのトマトの実務や調査に携わってきた。その研究の背景や問題意識について、述べたいと思う。

1　研究の背景

トマトはいまや、ヨーロッパや南北アメリカからアジア、北アフリカのエスニック料理にいたるまで世界中で使われている。トマトは世界の人々の舌を魅了する 21 世紀でもっとも重要な野菜の一つといっても過言ではない。このように考えることができる理由の一つに、トマトの味覚面における魅力が挙げられる。人間の味覚は生理学的には 5 つの味の要素で構成されている。そしてその構成要素の一つである“うま味”の物質は、グルタミン酸ということが知られている。トマトは天然のグルタミン酸を有しており、イタリアやメキシコなどトマトを食材として大量に使う国において、トマトがその国の料理のうま味の重要なソースにもなっていることが考えられる。さらに、最近では、トマトのもつ栄養面の魅力も注目されるようになってきている。トマトに含まれる栄養素であるリコピン、β－カロチン、ビタミン C、ビタミン E、カリウムや食物繊維が世界的に注目され、生活習慣病を予防する健康食材としても脚光を浴びているのである。このため、先進国だけでなく新興国や開発途上国でも、毎年、需要が急増している。

従来、トマトの露地栽培には、トマトベルト地帯（北緯 30～40 度、南緯 30～40 度）が属する亜熱帯気候（いわゆる地中海性気候）が適しているとされてきた。実際、トマトの露地栽培に必要な最適受粉温度（20～25℃）と最適積算温度（開花から収穫まで 1100～1250℃）を有するこの気候帯に、商業的規模によるトマトの露地栽培とトマトの加工産業が集中している。しかし、この地帯では競合作物の増加により、トマトの露地栽培に適した大規模かつ新たな耕地が年々不足してきており、トマト露地栽培の拡大に限界がみえてきている。このため、自然条件は厳しいものの、大規模な未耕地が残っており、トマト露地栽培の可能性がある低緯度地帯（北緯と南緯の 0～30 度）でのトマト増産が重要になってきている。

特に熱帯低地に位置する貧困な開発途上国に存在する広大な土地と低利用の若年労働力を活用する上でも、労働集約的なトマトの生産は重要である。そのことが地域の雇用機会を創出するだけでなく、地域興しにつながり、結果として極貧層への経済的な救済策になるものと考えられる。環境と共生し社会の発展に貢献するという視点からトマトを事例にすることで、これまで未踏のトマト研究分野への学術的寄与、および実学的貢献の礎を築くものと期待される。

ペルーICA 地域でインカ時代から使用されている灌漑用水路（現在の低投入型農業用点滴灌漑の水源）©沼田晃一

低緯度地帯にトマト増産の可能性があると考えられる理由として、次の 2 点を挙げることができる。1

点目は、低緯度地帯にあるペルー（南緯 0～30 度）が、トマトの原産国だということである。このことは低緯度地帯が元来トマト栽培に適した気候帯であるということを示唆している。2 点目は、やはりペルーにおいて、トマトと同じナス科のパプリカが商業的規模での露地栽培に成功し、現在では世界一の産出量を誇っているということである。生物学的に近い植物が数多く生産されているということからも、トマトが低緯度地帯においてパプリカと同様の生産可能性を有していると考えられるのである。

しかしペルーでは、2000 年ごろまで商業的規模によるトマトの露地栽培は失敗の連続であった。そのような状況を打開したのが、産学が一体となって行った ASKA Project であった。ASKA Project [1] の大規模トマト露地試験栽培が成功したのである。その後、ペルーの民間企業である ICATOM 社 [2]がこの成功体験を引き継ぎ、トマト生産の事業化に成功したことから、低緯度に位置する熱帯低地でのトマト栽培に大きな展望が開けてきた。

さらに ICATOM 社は 2003 年以降、低投入型農業 [3] により商業的規模での露地栽培のトマト増産に成功するとともに、加工用トマトの生産販売事業をペルーで初めて興すことに成功した。これらの成功事例により、ペルーと同じ緯度に位置する熱帯低地、とりわけ開発途上国でのトマト産業の成功の可能性が広がるものと考えられている。

一方で、ペルーでは ICATOM 社以外にトマト産業を興す企業が現れず、世界のトマト産業が大きく拡大するなかで、トマト産業において遅れをとっている。トマトと同様のナス科作物であるパプリカで世界最大の生産量を誇るペルーでトマト産業が成長すれば、ペルーと同じ緯度に位置する熱帯低地、特に開発途上国（例えば、モザンビーク）でのトマト産業の成功の可能性が広がるものと考えられる。それはさらに、その地域の貧困な農業者の経済的な地位の向上にも大きく寄与できるものと推察される。

2　研究の目的

以上のことを踏まえて、次の 3 点を研究の焦点に据えた。

1）南緯 0～30 度に位置するペルーでパプリカの商業的露地栽培に成功している事例と、同じナス科のトマトの商業的露地栽培に失敗している事例の要因を分析し、ペルーの商業的規模のトマト栽培による成功事例の背景と要因を明らかにする。そこで明らかになったことを踏まえて、ペルーにおける商業的規模のトマト露地栽培の可能性とその成功への条件を導き出す。

2）南緯 14 度に位置する地域で ICATOM 社が低投入型農業により商業的規模での露地栽培のトマト増産に成功し、さらには高付加価値型トマト産業をペルーで初めて興すことに成功した背景と要因を明らかにする。そこで明らかになったことを踏まえて、南緯 0～30 度の熱帯低地の途上国におけるトマト産業の興隆・発展に示唆を与え、低投入型農業と付加価値型産業の融合がそのための前提となるという仮説を実証する。

3）南緯 0～30 度の熱帯低地に位置するペルーでトマトの商業的露地栽培の圃場試験で成功を収めた ASKA Project と、その成果をもとにトマト産業興しに成功した ICATOM 社の事例から、なぜペルーにおいてトマトの露地栽培とトマト産業が興隆したのか、その要因を明らかにする。そこで明らかになったことを踏まえて、トマト産業クラスターの形成が、地域の新規事業の展開と雇用の創出にどのように貢献したかを解明する。

低投入型農業によるトマト露地栽培 ©沼田晃一

3　ペルートマトを取り上げる背景と理由

長年ペルーで農産品に関わる仕事を行ってきた筆者は、ペルー海岸砂漠地帯に沿って南から北へ流れるフンボルト寒流とペルー中央を南北に走るアンデス山脈の影響を受けて、熱帯低地の中では比較的気候が温暖で安定したペルーでのトマト生産とトマト産業に早くから注目してきた。1980～2000 年にかけて、ペルーでトマト栽培とトマト産業を手掛けた 7 つの企業すべてと仕事で接点を持っていった。この 7 社のトマト関連企業のうち、6 社はほかの国の事例を模倣して種々のトマト栽培方法とトマト加工方法

を駆使してトマト生産とトマト産業を興すことに注力したものの結局失敗し、本研究に登場する残りの1社であるICATOM社も操業初期の1995～2000年はトマト露地栽培とトマト加工において失敗の連続であった。長年ペルー農業に携わってきた筆者は、トマトと同じナス科のパプリカで露地栽培と産業興しに成功し、世界一の生産量を誇っているペルーが、なぜ潜在的に大きな可能性のあるトマト生産に失敗し、トマト産業を興せないのかという疑問を抱き続けてきた。このことはペルー農業の専門家でさえ解決できないむずかしい課題となっていた。

この課題を解決するため、筆者も参加してペルーで初めて日本とペルーの産学が一体となり、2000年に大規模なトマト露地試験栽培をペルー北部・海岸砂漠地帯で実施した。そのプロジェクトは主な参加メンバー（ALICORP[4] /SUMITOMO/KAGOME）の各頭文字をとってASKA Projectと命名された。この歴史的に意義の深いプロジェクトでの大規模露地栽培の成功により、熱帯低地のペルー海岸砂漠地帯でのトマト生産成功への条件が明らかになり、ペルーにおける新たなトマト産業興しへの道が初めて切り開かれた。その後この成功体験を踏襲したのが、熱帯低地にあるペルー南部海岸砂漠地帯で 1995～2000 年トマト生産の失敗に苦しんでいた ICATOM 社であった。同社はASKA Projectの成功事例を参考にして、2003年以降見事に商業的規模のトマト露地栽培に成功し、トマト産業興しの成功につながっていくことになった。

しかし、ICATOM社がトマト産業興しに成功した後、ペルーでは商業的規模のトマト生産とトマト産業興しに成功した企業は皆無であり[5]、世界のトマト産業が拡大していくなかでペルーは完全に取り残されていった。筆者は時系列的なペルーのトマト産業の展開過程を学術的に検証する必要性を痛感し、ペルーにおけるトマト産業の失敗事例と ASKA Projectの成功事例並びにICATOM社の成功事例を比較検証し、さらにペルーのパプリカ産業の成功事例と対比することで、ペルーにおける新たなトマト生産とトマト産業興しにつながる条件を導き出せるのではないかという考えを持つに至った。また、この条件を最大限応用することで、ペルーと同じ低緯度に位置する熱帯低地の貧困国におけるトマト産業興しへの貴重なレッスンを導き出せるのではないかと考えるようになったのである。

注

1）ASKA Projectは、低緯度地帯にあるペルーにおいて、周年での生鮮トマト露地栽培事業の成立可能性を調査するため、ペルーで初めて民間企業とペルー農業大学による産学一体で行われたプロジェクトである。ペルー最大の食品会社ALICORP社、日本の住友商事（株）とカゴメ（株）の頭文字をとって ASKA と命名された。ペルー国家灌漑プロジェクトにより開拓された広大な耕作可能地が存在するペルー北部のトルヒーヨ市（ペルー第3の都市）の沿岸砂漠地帯で、ドリップ灌漑による 10ha 規模の露地栽培試験を実施し、通年で生産性、品質、コスト、適合品種および栽培条件の評価を行った。また、河川流域の耕作地域で畝間灌漑による 10ha 規模の栽培試験を実施し、同様の評価を行った。

2）チリ IANSA グループ（シュガービート生産を中心とする農業企業グループ）のペルー法人として 1995 年ペルー ICA 市に設立された。トマト生産とトマト加工品（トマトペースト）事業を中心として、ペルーで初めてトマト産業興しに成功した企業。年間売上高約 20 億円。

3）環境負担の少ない農作物の生産を目的とする環境と共存する農業。

4）ペルー最大の食品企業であり、ASKA Project のペルーパートナー。ペルー最大の財閥 ROMERO グループの中核企業で、年間売上高は約 1000 億円。

5）当時ペルー国内で企業間の協業や産官学の連携が機能しておらず、ICATOM 社のトマト生産とトマト産業興しの成功体験が他の企業に伝えられなかったことから、ICATOM 社に続く企業は出現しなかった。

●ある日チチェン・イツァ遺跡公園で感じた違和感について　－ 露店商不法侵入問題のいま －

杓谷茂樹（中部大学国際関係学部）

メキシコ、ユカタン州中部にある世界遺産チチェン・イツァ。2013年8月下旬のある日、私はいつものようにここにやって来た。年に1～3回のペースでこの遺跡公園に通ってもう 12 年になる。前年の 12 月 21 日に「マヤの予言」云々の大騒ぎぶりを見に来て以来の訪問で、今回の目的は「普段の」遺跡公園の様子の観察だった。だが、眼前に広がる公園内の風景自体はここ数年たいして変化していないにもかかわらず、歩き出してすぐに、いつもとは違うどこか重苦しい空気が空間にたちこめ、私にのしかかってくるのを感じた。「公園の中が何か変だ。静かすぎ

る」と国立人類学歴史学研究所（INAH）で公園管理をしている友人にその違和感をぶつけると、彼は「(空気の違いが) 君にもわかったんだね？」と言ってニヤッと笑った。

遺跡公園の日常の光景

現在、チチェン・イツァ遺跡公園を訪れる観光客は、表玄関であるサービスユニットを通って公園内に一歩足を踏み入れると、まずは簡単な刺繍をしたハンカチーフを 1 枚 1 ドルで買ってくれと声をかけてくる女性たちにはじまって、通路の両側を埋め尽くした露店からの、うるさいくらいの民芸品販売攻勢という洗礼を受けなければ、パンフレットに載っていたあの有名なピラミッドにはお目にかかれない。日差しの強い場所なので、観光客はできるだけ木陰を選んで公園の中を動き回ることになるが、その行く先々の木陰では、しばしば地元の人々が店を広げて彼らを待ち受けている。そしてツアーガイドの説明が一区切りつくやいなや、彼らはすかさず近づいてきて声をかけてくる。彼らのおかげで普段のチチェン・イツァはとにかくにぎやかだ。

それぞれの露店は基本的に専門化していて、木彫を製作しながら売っているもの、大小の石の置物ばかり並べているもの、金属のアクセサリーを売っているもの、T シャツや民族衣装、テーブルクロスなどの布類を扱っているもの、はてはプエブラで作られているというタラベラ焼の器や置物やプロレスのマスクを売っているものまで、実にバラエティに富んでいる。よく見ると、並んでいる木彫の壁飾りの円盤や T シャツ、ブランケットなどに描かれたモチーフには、アステカのカレンダーストーンなどのマヤ以外の文化要素がしばしば混ざっていたりするが、売っている方は全くお構いなしだ。一方、それほどマヤについて詳しいわけではない一般的な観光客の側も、そうした「民芸品」を古代マヤ文明の遺跡の楽しい思い出として、満足して我が家に持ち帰っていくのである。

おそらく本学会の会員諸氏の多くは、こうした公園内の露店商や売り子たちの存在を、遺跡見学に邪魔な存在として感じるのではないだろうかと思う。しかし、一般の観光客を眺めていると、彼らの多くはそうした風景を遺跡公園の普通のありようとして受け入れているようである。その大半が宿泊しているはずのカンクンやリヴィエラ・マヤの町中でも同じようなものは売られているし、遺跡公園の中で地元住民が民芸品などを売っているというのも、メキシコに限らず特に珍しい光景ではないから当然だろう。実際、『地球の歩き方 メキシコ』の最新版（13-14 年版）のチチェン・イツァ遺跡の紹介ページでも、何枚かの代表的な建造物の写真といっしょに、こうした露店商の写真が「敷地内には民芸品を売る屋台が並ぶ」という説明つきで載っていて、公園内のアトラクションのひとつとしての扱いに何ら否定的なニュアンスは見られない。

チチェン・イツァ遺跡公園内の露店商　©杓谷茂樹

公園内に不法侵入した露店商

しかし、10 年前のチチェン・イツァ遺跡公園を知っている者にとっては、その光景は目を疑うほどの変わりようなのだ。というのは 2004 年の年末までは公園内で民芸品を売っている者は皆無だったからだ。それは 1988 年の世界遺産登録に合わせて、民芸品販売はサービスユニットの隣にある民芸品市場の区画で行うことになり、みやげ物を売る地元住民は公園の外に閉め出されてしまっていたことによる。あの頃は清涼飲料水やスナック類を売る 2 軒の売店の他には、公園内にそうした商業活動が行われる場所はなく、観光客は世界遺産「先スペイン期の都市チチェン・イッツァ」のイメージに浸りながら、公園中を静かに散策することができたものだった。

ところが 2005 年の夏に 1 年ぶりに訪れた私を待っていたのは、公園内のいたるところに民芸品を売る露店が陣取っているという信じられない光景だった。もちろん不法な行為である。そこでサービスユニットにいた公園管理担当者にいったい何が起こったのかとしつこく尋ねると、重たい口をようやく開いて、前年の末頃から地元の民芸品売りの人々が「Tunami

のように」侵入してきて、止めようがなかったのだとポロッと話してくれた。

長らく公園の外に閉め出されて不満を抱えていた地元住民も、ついに我慢の限界を超えてしまったのだろうと、その時は私も単純に考えていた。だが、INAH や州の遺跡管理者がその後どういうわけかこの事態を放置し続けてきたことは、そこにもっと複雑な背景があったことを物語っている。ここでは侵入の経緯については触れないが、いずれにしても、あれから 10 年近くのあいだに公園の中で商売する人々の数は増加の一途を辿り、いまでは 1000 人を超えるまでになってしまった。

チチェン・イツァ遺跡公園は長らく、これを管理する国家や州政府および INAH と、遺跡の広大な土地の所有者で、ホテル・マヤランドなどのオーナーであるバルバチャーノ家との「あうんの呼吸」の上に成り立ってきた。そして、遺跡の周辺に住む人々はそこにぶら下がるような形で関わってきたのである。長くこの問題をウォッチしてきた Q.カスタニェダによれば、実はこれまでに 2 回、同様の不法侵入事件が起こってきたという。だから今回は 3 度目の侵入ということになる。これらはいずれも何らかの理由でその「あうんの呼吸」が乱れたときに起こってきたことだった。

だが、それまでの 2 回がだいたい 3 年ほどで収束しているのに対し、この 3 回目の侵入はまもなく 10 年になろうとし、その収束への見通しも全く立っていない。2〜300 人程度の侵入だった最初の 2 回と違い、1000 人規模にふくれあがってしまった以上、もはや彼らを柵の外に追い出してしまえばそれで済むという単純な話では収まらないのだ。

あの日感じた違和感

露店商の侵入から 10 年近くの間に、チチェン・イツァ遺跡公園ではいろいろなことがあった。毎年春分の日と秋分の日にはエル・カスティージョで「ククルカンの降臨」の一大イベントがあるし、「マヤの予言」によれば世界が滅亡するといわれた 2012 年 12 月 21 日には、ここにもさまざまな人たちが集まって大騒ぎになった。1997 年のルチアーノ・パバロッティのコンサートが契機となり、プラシド・ドミンゴ、サラ・ブライトマン、エルトン・ジョンといった大物アーティストがコンサートを行った。また、多くの要人の訪問も受けていて、2013 年 6 月には中国の習近平主席夫妻がここを訪れていた。一方で、チチェン・イツァ遺跡がインターネットによる世界中からの投票で「新・世界の七不思議」のひとつに選ばれたかと思えば、2010 年 3 月には、長く遺跡の土地を所有してきたバルバチャーノ家が、ついに遺跡の中心部分の土地をユカタン州政府に譲渡するという歴史的な出来事もあった。

ここ数年、このようなイベントや事件が外部から注目されるたびに、公園内の露店商の多さを問題視する声がメディアを通して聞かれるようになってきていた。だから、州政府はこうしたイベントの時には公園の中での商業活動を自粛するように露店商たちに要請してきた。

だがこれに対し、この 10 年間に、当初は感情的に勢いで侵入してきていた露店商たちも団結し、組織として自分たちの公園内での地位を主張するようになってきている。彼らは主にティヌム市に属するピステやシカラコープなどのコミュニティから毎日やって来る。そして現在 3 つの露店商組合組織が存在しているそうだ。特にその中でも最大のグループである「ヌエバ・ククルカン」のリーダーや弁護士たちは、自分たちの生活の保障を訴えたり、州政府への不満を述べたりするなど、しばしばメディアに登場している。

そして 2013 年 8 月のあの日である。この年の春分の日を前にして、ユカタン州文化観光局（CULTUR）のトップから公園内の露店商を外部に移すことでこの問題の解決を目指す旨の発言があり、露店商側がこれを断固拒否して以降、両者の対話は平行線を辿っていた。そして、この問題が一向に解決に向かわないことに対して、政治家やホテル業界の有力者などさまざまな方面から不満が表明されていた。そうした中には、公園内のあまりに多すぎる露店商の存在とその振る舞いが、観光イメージを悪化させていることを懸念する意見も多かった。

冒頭の友人の話しによれば、そうした批判への対応として、露店商たちはこの時、話し合いの末、観光客へのうるさいくらいの露骨なアプローチを控え、商品に関心を示した観光客に対してのみ声をかけることを取り決めていたのだそうだ。あの時の彼らは、外からのプレッシャーを受けて焦った州政府や INAH が、夏休みも終わり観光客が減ってきたところで、いつ自分たちを強制的に排除する動きにでるかもしれないという不信感と危機感を抱きながら、

いつもより声を落として、観光客にじっと鋭い視線を送っていたのだ。

あの日、私が公園内の空気に感じ取った違和感は、10年の間に組織を整え、行政や観光業界と対峙してしたたかに立ち回っている露店商たちの姿を再認識させてくれることになった。一期一会でここにやって来る観光客にはおよそ見えない形で、チチェン・イツァ遺跡公園では今も激しい駆け引きが続いている。

●リャマたちの今：先住民社会でのリャマの役割の変化

若林大我（法政大学等非常勤講師）

その時に撮った映像を見直すと、家畜の扱いのうまさに改めて目を奪われる。「フシ、フシ」という掛け声や、ピーッとよく響く口笛に導かれて、リャマたちはスムーズに囲いへ誘導されていく。

家畜囲いに入れられたオスのリャマたちは、普段標高 4800m 前後の牧草地に放置されており、毎日放牧に連れて行くことはしない。荷運びに必要な時にだけ、ウマに乗って駆り集めてくるのだ。

10月下旬のこの頃、ジャガイモ耕地の使用権を持っている多くの家庭で、「グアノ・アスタイ（guano *astay*）」という作業が行われる。「グアノ」は本来、肥料として使われる海鳥の糞の化石を指すが、農村部では肥料一般をこう呼ぶ。「アスタイ」は「運搬する」を意味するケチュア語だ。10月中旬にはイモの播種が行われるが、播種した畑には施肥が必要となる。そのためのヒツジやアルパカの糞を、リャマの背に載せて耕地まで運ぶのである。

リャマの毛で織った袋に糞を詰め、80頭ほどのリャマの背に積み終わったら、群れに対してチチャを振り撒き献酒（*t'inka*）する。群れの傍らでしばらくコカを噛み、チチャを飲んだら出発だ。

可耕地のある共同体の最低標高部までは、この集落からだと山をひとつ越えて 30 分ほどの道のりである。はぐれそうになる個体を群れに追い戻しながら急斜面を歩くのは容易ではないが、わずか5人の人手で手際よく目的地に向かう。

畑へ到着するとすぐに荷を降ろし、種イモが植えてあるラインの間に、等間隔に糞を出していく。12月上旬にジャガイモが芽を出し始めると、寒さから保護するための土寄せ（*yapuy*）を行うが、この時に用意しておいた糞を一緒に撒くのだ。

グアノ・アスタイはまとまった頭数のリャマを必要とし、1 世帯分のリャマでは足りないので、通常親族同士の労働交換（*ayni*）を行う。この日の作業に参加し、それぞれリャマを拠出していたのも、畑の使用権を持つ世帯の家長である男性、その妹夫婦、父方の従兄弟、さらに姪だった。1 世帯の畑のグアノ・アスタイを協力して1日で終わらせてしまい、翌日は別の世帯、また次の日は別の世帯... と順番に作業していく。糞を入れる大きな袋もこれらの世帯で融通し合ったもので、世帯毎に模様が異なっており、持ち主が分かるようになっている。

厚手のリャマ毛の布でできた袋は、糞を出しても積み重ねればかなりの重さになる。しかしグアノ・アスタイの帰り道では、空の袋をリャマに背負わせてはならないとされている。このため袋はロープで束ね、男手で手分けして担ぎ、女性たちはリャマを牧草地まで誘導していく。早朝のリャマ集めから始まった1日の作業は、午後3時頃になって終了した。

写真 1: グアノ・アスタイの後、空になった袋を担いで歩く（2011 年 10 月、先住民共同体チリュカ）

ここは筆者にとって2番目のフィールドである、ペルー南部のクスコ県（Departamento de Cusco）カンチス郡（Provincia de Canchis）にある先住民共同体チリュカ（Comunidad Campesina de Chillca）だ。総面積は約 106.3km²（山手線内側の面積の約 1.7 倍）、領域の標高は 4250m から 6372m までで、共同体全体がクスコ県の最高峰であるアウサンガテ山（Nevado Auzangate）の東麓及び南麓にあたる。標高が高いためジャガイモが作れるのは領域内のごく一部に限られ、地元の人々の主な生活の糧はアルパカ飼育となっている。

今から 10 年以上前、大学院に進学した頃の筆者

の関心は、先スペイン期、特に形成期後期から地方発展期に至る時期の家畜利用にあった。スペイン人の侵入に至るまでリャマ（*Lama glama*）とアルパカ（*Vicugna pacos*）以外の牧畜家畜を持たず、また旧大陸の牧畜社会においては重要な栄養源であるはずの乳を利用しないという特異な形態をとったアンデスの牧畜は、単なる食糧獲得とは違った側面で文明の展開に貢献したと考えたからだ。家畜を動物性タンパク源として消費する以外にどう利用することが、インカ帝国を極点とする諸政体の形成に結び付いたのか。動物考古学的なアプローチによって、その初期の段階を明らかにしたいと目論んでいた。

ところが、こうしたテーマを追究するには、発掘によって出土する遺物を調べるのみでは限界があった。毛や糞にしろ、骨にしろ、動物遺存体はあくまで動物が死んだ後に残るものであり、当の動物が生前どのように飼われ、どのように使われていたかについて多くを語ってはくれない。大量の骨の分析から得られた統計的なデータを解釈するにしても、その解釈の土台となっている知識が正しいのかどうか確信が持てない。それならばいっそ、自分の目で現代のアンデス牧畜を見てみたら、新しい着想が得られるのではないか。

こんな発想から最初のフィールドである、先住民共同体パンパリャクタ・アルタ（Comunidad Campesina de Pampallacta Alta）で予備調査を始めたのが、2004 年のことだった。クスコ県中部カルカ郡（Provincia de Calca）に位置するこの共同体は標高 3400m から 4800m に及び、リャマ、アルパカ、ヒツジを中心とする牧畜に加え、ジャガイモ農耕も重要な生業となっている。

本格的な民族考古学的調査を行うのではないとはいえ、現代の情報を考古遺物の解釈に援用しようとする以上、いわゆる「斉一性」の問題がつきまとう。経済、社会、文化などのあらゆる文脈で現代とは異なっていたはずの過去について、民族誌的な情報が果たして参照軸となりうるのかという、(恐らく永遠に決着しない）議論だ。このためパンパリャクタ・アルタでの調査を始めた当初、筆者はなるべく文化や社会には目を向けず、共同体の土地の生態学的な条件が家畜飼育と利用の方法にどう反映されるのかに焦点を絞るよう心掛けていた。

しかし調査を進めるにつれ、こうした考えがいかに浅はかだったかを思い知らされた。パンパリャクタ・アルタの人々にとって、牧畜は決してただの生計の手段ではないからだ。家畜を介した人間関係を見ても、家畜繁殖儀礼をはじめとする各種の年中儀礼を見ても、牧畜はあくまで共同体の生活全体に埋め込まれて営まれていることを痛感する。元々は考古学的な関心から始めたフィールドワークだったが、やがて、まずは現代のアンデス牧畜そのものをよく知らなければと思うようになった。いわば典型的な農牧複合社会であるパンパリャクタ・アルタだけでなく、より牧畜の比重が大きい別のフィールドでの比較調査をしたいと考えたのは、このような経緯からである。

チリュカで行われるリャマを用いたグアノ・アスタイは、共同体の人々にとって牧畜というものが、いかに生活の多様な側面と結び付いているかを示す好例だろう。裏を返せばそれは、牧畜を切り口とすれば、芋づる式に多くの事実が見えてくることを意味する。

同じ集落に住んでいる別の親類が、畑の使用権を持っているにも関わらず、なぜこの時のグアノ・アスタイに参加して労働交換をしなかったのか、また空になった袋を担いで帰るのは大変な労力なのに、なぜリャマの背に載せて帰らせてはならないとされるのかなど、この観察からだけでも湧いてきた疑問や、それによって見えてきた事実がある。

クスコ県を貫くアマゾン水系の源流のひとつであるビルカノタ川（Río Vilcanota）沿いには幹線道路が延びているが、チリュカが位置する高地部からビルカノタ谷まで道路が通じたのは、ようやく 2007 年のことらしい。今でこそこの道路を通じ、週末には定期的なトラックの往来があるので、町へ下りたり買い物したりすることは日常茶飯事だが、20 世紀末までは毎年 6 月下旬から 7 月下旬になると、同じクスコ県内のパウカルタンボ郡（Provincia de Paucartambo）までリャマのキャラバンを率いた物資交換の旅を行っていたという。リャマやアルパカの肉、リャマ毛で編んだロープ、アルパカ毛に比べると商品価値が低いヒツジの原毛などを、トウモロコシや落花生、カボチャ、そしてコカなどと交換していたそうだ。またチリュカよりもジャガイモの可耕地が広い、チリュカの南西隣にあたる別の先住民共同体には、同じく 20 世紀末頃まで、遠くクスコ県の南隣にあたるアレキパ県（Departamento de

Arequipa）北部のチバイ（Chivay）やカイリョマ（Cailloma）地方から、リャマを引き連れて凍結乾燥イモであるチュニョ（*ch'uño*）やモラヤ（*moraya*）を手に入れに来る人々がいたらしい。

過去の多くの民族誌にも記録されているこうしたリャマの旅は、道路網の整備と現金経済の浸透によって、今急速に衰微しつつある。チリュカでも、品種改良によってアルパカ毛の質を良くしようとする人が増えているし、これまで道路が通じていなかった方面に道路を新設し、アルパカ毛の仲買人が来やすくすることで、買い取り競争によって価格を上げようという動きも起きている。アルパカ毛生産に特化した共同体になりつつあるのだ。

しかし彼らにとってアルパカの経済的意味がいかに大きくなり、リャマの実利的な価値が下がろうと、リャマへの愛着は失われてはいないようだ。オスのリャマには1頭1頭名前が付けられているし、毎年7月下旬にはオスのリャマへの献酒や耳飾りの更新をする「マチュ・ティカイ（*machu t'ikay*）」という儀礼も各家庭で行われる。家畜が担う文化的意味は恐らく、経済的意味からのみでは推し量れないものなのだろう。

長距離輸送の主役でなくなったリャマたちは今後、どんな活路を見出して行くのか。どちらかといえばアルパカよりも、大きくて丈夫、かつ色や模様も個性豊かなリャマが好きな筆者には気になるところだが、実はクスコの町には今、アルパカ毛ではなくリャマ毛で作ったセーターや、リャマ皮の鞄、財布などを扱う土産物店がある。2011年時点でリマとラ・パスにも店舗があり、原料の皮はボリビアで、毛はペルーのアレキパで仕入れているらしい。リャマ毛のセーター、リャマ好きの方は一度試してみたらいかがだろうか。

写真 2: 荷運び用のオスのリャマ。群れの先導役となる個体は首に鈴を付ける（2011年7月、先住民共同体チリュカ）

写真 3: 共同体の女の子とお気に入りの仔リャマ（2011年6月、先住民共同体チリュカ）

第３回東日本部会研究懇談会の報告

■第３回東日本部会研究懇談会『同位体分析による南アメリカ考古科学の展開』

平成26年6月1日（日）、東京大学総合研究博物館にて第3回東日本部会研究懇談会を開催した。参加者は会員18名、非会員10名であった。24年度はGIS考古学、25年度は古代社会への多様な方法論的アプローチをテーマとしたが、今回は「同位体分析による南アメリカ考古科学の展開」と題し、同位体分析に取り組む若手研究者にご登壇願った。

瀧上舞会員（山形大学、日本学術振興会特別研究員 PD）の「インカ帝国の統治による影響と食性の地域差－炭素・窒素同位体比を用いた研究－」は、人骨の炭素・窒素同位体比からの食性分析の成果発表で、アメリカ研究の重要関心事であるトウモロコシが一つの焦点となった。大森貴之氏（東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室特任研究員）には「南米における高確度年代推定の危うさ：放射性炭素年代の暦年較正における問題」として、年代測定の暦年較正に関する研究動向と、ペルー南海岸の木材を使用したご自身の研究についてお話しいただいた。内容はHP上の抄録を参照されたい。

前者はインカ期資料が中心、後者はワリ期の年代が得られているということで、それぞれを精力的に

調査している大平秀一会員（東海大学文学部教授）と渡部森哉会員（南山大学人文学部准教授）をコメンテーターとしてお招きした。また米田穣氏（東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室教授）には、加速器質量分析のラボを運営する専門家として、双方に対してコメントをいただくことにした。

今回の新たな試みは二つある。まず理化学分析を主題に据えたことである。日本のアカデミズムにおいて文理を隔てる溝は深く、古代史研究者と理化学分析の専門家とがコンスタントな意見交換を重ねる環境というのは、なかなか自発的には生まれない。文系側の我が身を顧みると、便利なツールとして先端的な分析を取り入れながら、文理の「分業」に甘え、その理論的背景を理解しようという意欲は不十分だったように思う。しかし理化学分野における知見の蓄積や分析手法の向上はつねに現在進行形であるし、さらなる発展のためには考古・歴史データの適切なフィードバックが必要であったりする。つまり先端的な考古科学とは、皆で意見交換しながら創っていくものである。そのような問題意識を広く共有することが今回の企画意図の根幹である。

もう一つの試みは、非会員を発表者・コメンテーターとして迎えたことである。研究大会では実現できないような自由で広範な意見交換が研究懇談会立ち上げに際しての理念のひとつであり、会員の関心に応える話題を提供していただき、また提供すべくお招きした。こういった交流が広く研究レベルの底上げにつながることを期待している。

瀧上会員の発表からは、埋葬人骨の分析結果をインカ史研究における移住政策や人身供犠のデータといかに関連づけるのか、同位体分析における「食性」と文化史的な「食性」はいかに対応するのか、さらに考古・歴史学から独立した自然科学ならではの貢献の可能性は、などと根源的な討論が展開した。また発表者と聴講者が民族誌的知見を情報交換するなど、終始双方向的に議論が進んだ。

大気中 ^{14}C 濃度は不変であるという前提で実用化された放射性炭素年代測定だが、やがて過去に変動があったことが分かり、暦年較正の手法が確立された。一般的な考古学者の理解はそこまでは追いついているだろう。しかし大森氏はさらに、地球規模の大気循環による ^{14}C 濃度の地域差に踏み込んだ。オセアニアの木材に準拠した南半球の較正曲線を中央アンデスへ適用すると、数十年の差が生じうるという事例研究は、多くの聴講者に衝撃を与えた。大森氏のサンプルが対応するワリ期もそうだが、古代史研究では例えば 50 年単位で社会動態を論じるような局面も少なくないからである。

意見交換のなかで分析者側が調査者側に、研究の精緻化のために人骨や年輪のサンプル提供を呼びかけ、また出土コンテクストの記載やサンプリングにおける注意点などを伝えたことが印象的であった。本企画を契機に相互のフィードバックが始まり、一丸となって研究を躍進させていくことを願う。

なお西日本部会第3回研究懇談会は今秋開催予定で、東日本部会では12月23日（祝）にメソアメリカ研究者を招き第4回研究懇談会を企画中である。

（東日本部会幹事：鶴見英成）

公開フォーラム・国際シンポジウム（本学会協力事業）の報告

■公開フォーラム「古代文明の生成過程－西アジアとアンデスの比較－」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2014 年 1 月 26 日（日）、ＪＰタワー&カンファレンスホール 1 において、公開フォーラム「古代文明の生成過程－西アジアとアンデスの比較－」が催された。国立民族学博物館、科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

旧大陸と新大陸の古代文明についての最新の研究成果が聞けるとあり、一般参加者が 104 名と盛況で、最後のディスカッションでは予定していた時間が足

りなくなるほど質問やコメントが多く寄せられ、非常に有意義な会であった。

発表者は、発表順に三宅裕（筑波大学）、下釜和也（古代オリエント博物館）、芝田幸一郎（神戸市外国語大学）、関雄二（国立民族学博物館）の 4 名である。

従来、西アジアでは豊かな自然環境のもと、狩猟採集から農耕定住、余剰生産物の蓄積、そして巨大なモニュメントの建設へと連なる文明形成過程が示されてきた。その一方、アンデスでは西アジアと異なり、神殿を中心とした独自の文明形成過程が指摘されてきた。しかしながら、近年の両地域における調査成果によると、両地域に展開した古代文明についての文明観、あるいは両文明の特性についての議論は大きく変化しつつある。

このことをふまえて、本フォーラムでは最新の調査成果にもとづいた発表がおこなわれた。前半の西アジアの発表では、はじめに三宅氏によりトルコ南東部に位置するギョベックリ・テペ遺跡での発掘調査データを中心に、新石器時代についての新たな社会像が提示された。次に下釜氏は、新石器時代から銅石器時代までのメソポタミア地域を俯瞰しながら、現状で把握される文明形成の筋道を示した。後半のアンデスの発表では、まず、芝田氏がペルー北部海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティーダ遺跡での調査成果をもとに、アンデス形成期の世界観を示した。また、関氏はペルー北部高地のパコパンパ遺跡におけるジャガー人間を表した石彫の発見などを通じて、アンデスにおける社会的格差の出現について論じた。そして最後には、両文明の比較検討を含めた総合的な討論がおこなわれた。

（写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

■公開フォーラム「世界文化遺産テオティワカンの現状と保存」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2014 年 1 月 27 日（月）、国立民族学博物館第 4 セミナー室において、「公開フォーラム：世界文化遺産テオティワカンの現状と保存」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

（写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

本フォーラムは、メキシコ中央高原に位置する世界文化遺産テオティワカンをめぐる最新の研究成果をはじめ、今後の調査計画や保存活動に関する講演を聴くことができるまたとない機会であり、それらの議論に関するディスカッションに参加できるということもあって、事前のアナウンスが開催日の直前におこなわれたにもかかわらず、当日の一般参加者は 28 名と盛況であった。

発表者は、発表順に杉山三郎（愛知県立大学）とセルヒオ・ゴメス（メキシコ国立人類学歴史学研究所）で、関雄二（国立民族学博物館）が司会およびコメンテーターをつとめた。

テオティワカンは、世界文化遺産にも登録されている大都市遺跡であり、メソアメリカにおける文明形成を論じるうえで極めて重要な遺跡である。杉山氏は、このテオティワカン遺跡で継続的に発掘調査をおこなっており、これまでに複数の主要建造物の調査を手掛けてきた。また、ゴメス氏は「羽毛の蛇神殿」下部で発見された古代トンネルの発掘調査を

指揮している。ゴメス氏によれば、トンネルの最深部には重要な墓がある可能性が高いとされる。さらに両者は共同で、「羽毛の蛇神殿」の修復・保存活動を計画中である。

本フォーラムではまず、杉山氏によって、これまでのテオティワカン研究の歴史とその成果、とくにテオティワカンの都市構造や社会構造、あるいは権力性などに関わる発表がおこなわれた。同時に今後の課題も報告された。次に、ゴメス氏は本邦初公開となる最新の発掘調査の成果と、今後の修復・保存活動計画についての発表をおこなった。そして最後に、関氏の司会進行のもとテオティワカン遺跡をめぐる学術的研究にとどまらず、その保存・修復活動や文化遺産、それらを取り巻く研究者および専門家以外の人々のあり方までにいたる包括的な討論が繰り広げられた。

■国際シンポジウム「Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú」（ペルー南海岸における社会の実態と変容）

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

（写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

2014 年 2 月 16 日（日）、国立民族学博物館　第 4 セミナー室において、国際シンポジウム「Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú」（ペルー南海岸における社会の実態と変容）が開催された。本シンポジウムの主催は、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）、共催は山形大学人文学部・科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）、および頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」（代表：坂井正人）、協力は古代アメリカ学会であった。

地上絵で著名なナスカ社会（紀元前 100 年～紀元後 600 年）に代表されるペルー南海岸の先スペイン期の諸社会に関する最新の調査成果を、国内外の研究者から聞くことができる貴重な機会であったため、使用言語がスペイン語で同時通訳はなかったにも関わらず、参加者は 23 名と盛況で、非常に精緻な発表と活発な議論が繰りひろげられた。

発表者は、発表順にクリスティーナ・コンリー（テキサス州立大学）、マルクス・ラインデル（ドイツ国立考古学研究所）、ケヴィン・ヴォーン（パデュー大学）、松本雄一（山形大学）、坂井正人（山形大学）の 5 名で、関雄二（国立民族学博物館）が総合司会を担当した。

近年のナスカ社会の研究に代表されるように、ペルー南海岸では活発な考古学調査が実施されており、先スペイン期の諸社会が、対応する時期のペルー北海岸の社会とは大きく異なる社会プロセスを歩んだことが明らかとなってきている。

一口にペルー南海岸といってもその範囲は広大でアンデス山脈から太平洋にそそぐ河川によっていくつかの地区に分かれており、それぞれの地域社会の実態は多様である。さらに、ナスカ社会は、あくまでナスカ期というこの地域における一時代の人間活動の痕跡にすぎず、実際にはそれ以前から多様な社会が存在し、相互に交流しながら展開してきた。

このような背景のもとでおこなわれた本シンポジウムでは、発表者それぞれが最新の調査成果を提示し、ペルー南海岸に成立した諸社会の実態とその動態に関する知見を深め、共有することを目的としていた。またその際には、権力と地域間交流が重要であるという認識が共有され、周辺地域との関係も視野にいれた発表や議論がおこなわれた。

はじめに、クリスティーナ・コンリーは、約 5000 年間という長期間にわたって利用されたアハ川流域のラ・ティサ遺跡の発掘調査にもとづいて、ナスカにおける権力と社会変化の通時的変遷について論じた。次に、マルクス・ラインデルは、パルパ川流域において、ナスカ社会に先立ち、その権力形成の下

地となったと考えられるパラカス社会（紀元前 800－200 年）の動態を主にセトルメントパターンの変遷から論じた。また、ケヴィン・ヴォーンは、ナスカの大神殿カワチ遺跡のデータや多彩色土器の製作に関わる分析と、自身のイカ川流域の調査成果から、ナスカにおける巡礼の役割と権力について論じた。さらに、松本雄一は、ペルー南部高地アヤクーチョにおける形成期の神殿遺跡カンパナユック・ルミ（紀元前 1000－500 年）の調査データを用いて、高地社会の変化に際してパラカス社会の影響がみられるようになる現象に、神殿への巡礼モデルを用いた解釈を提示した。そして、坂井正人は、リオ・グランデ川流域における調査成果をまとめ、直線の地上絵とその中心点における活動の通時的変化を論じたうえで、カワチ遺跡と地上絵を軸にナスカの文化的景観と社会像についての見解を示した。これらをふまえたうえで最後には、編年、生業、気候変動、巡礼、戦争などをテーマとして、パラカス、ナスカ、中期ホライズンという順に、発表者とコメンテーター、聴講していた参加者を含めてペルー南海岸諸社会に関する総合的な討論がおこなわれた。

■国際学術講演会「ナスカとパルパの地上絵と社会＜考古学研究の最前線＞」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

（写真提供：山形大学人文学部）

2014 年 2 月 22 日（土）、山形大学小白川キャンパスにおいて、国際学術講演会「ナスカとパルパの地上絵と社会＜考古学研究の最前線＞」が催された。山形大学人文学部が主催し、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）、および頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」（代表：坂井正人）が共催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

ペルー南海岸のナスカおよびパルパ地域の地上絵と先史社会に関する最新の調査成果にもとづいて、国内外の気鋭の研究者から考古学研究の最前線の話しが聞ける重要な機会であり、参加者は 152 名と極めて盛況であった。

まず、楠田枝里子氏による特別講演があったのち、マルクス・ラインデル（ドイツ国立考古学研究所）、クリスティーナ・コンリー（テキサス州立大学）、ケヴィン・ヴォーン（パデュー大学）、坂井正人（山形大学）の 4 名による講演がおこなわれた。総合司会は、松本雄一（山形大学）が担当した。

ペルー南海岸のナスカ地域やパルパ地域では、近年活発な考古学調査がおこなわれており、その結果として先スペイン期の地域社会が、同時期にペルーの他地域で存在した社会とは大きく異なる様相を示すことが明らかとなってきた。そこで本講演会では、ナスカ期（紀元前 100 年～紀元後 600 年）だけでなく、その前後の時期に製作された地上絵、神殿、居住地、鉱山といった様々な遺跡の調査成果を通じて、ペルー南海岸の先スペイン期社会の通時的動態を環境変化のデータなどを組み合わせて多角的に論じることが目指された。

はじめに、楠田枝里子氏が、マリア・ライヘとの交流とこれまで氏がおこなってきた地上絵の保護活動支援についての講演をおこなった。次に、マルクス・ラインデルは、パルパ川流域における地上絵や古環境をめぐる調査を総合して、環境と人間活動との関係について論じた。また、クリスティーナ・コンリーは、ナスカ期とそれに続くワリ期（紀元度 700－1000 年）や イカ期（紀元後 1000－16 世紀）を含めた長期的視野のなかで、ナスカ地域における宗教活動について講演した。続くケヴィン・ヴォーンは、神殿ではなく、小規模集落遺跡や鉱山遺跡の調査成果からみたナスカ社会の新たな社会像について論じた。そして最後に、坂井正人がこれまでに実施してきた山形大学による地上絵に関する研究成果を総括

したうえで、ナスカの地上絵がどのように使われ、どう社会変化と関連してきたかについての講演をおこなった。

■公開フォーラム「アメリカ大陸古代文明の神秘のベールをはがす」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

（写真提供：法政大学国際文化学部）

2014 年 4 月 19 日（土）、法政大学市ヶ谷キャンパス、ボアソナード・タワー、スカイホールにおいて、公開フォーラム「アメリカ大陸古代文明の神秘のベールをはがす」が開催された。主催は、法政大学国際文化学部、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）で、アンデス文明研究会と法政大学アンデス文化研究会が共催、古代アメリカ学会が協力した事業であった。

本フォーラムの対象は、アメリカ大陸で成立した古代文明、マヤとアンデスである。フォーラムの冒頭では、シンポジウムに先立ち、長年アンデス考古学を主導してきた大貫良夫氏（野外民族博物館リトルワールド館長・東京大学名誉教授）の基調講演がおこなわれた。講演では日本のアンデス研究草創期のメンバーである大貫氏によって、アンデス研究史が回顧され、研究を実現してきたその道のりが語られた。

その後におこなわれた「古代文明の終焉」をテーマとしたシンポジウムでは、アメリカ大陸古代文明の滅亡や衰退に焦点があてられ、その実態や原因が最新の研究成果を通じて論じられた。またそれにとどまらず、古代文明の末裔と言われてきたアンデスの先住民系の人々にも焦点をあて、消滅、衰退、貧困のイメージで語られる彼ら／彼女らが暮らす社会の実態にせまる講演がおこなわれた。シンポジウムのパネリストは、発表順に、青山和夫（茨城大学教授）、坂井正人（山形大学教授）、渡部森哉（南山大学准教授）、佐々木直美（法政大学准教授）の 4 名である。

まず青山氏は、紀元前 1000 年～紀元後 1000 年の活動が確認されるグアテマラのセイバル遺跡の発掘調査成果を報告した。そしてそれをもとに、マヤ文明は古典期（紀元後 250 年～紀元後 900/1000 年）に崩壊したのではなく、16 世紀まで興隆した古代文明であり、マヤは現代まで続く、生きている文化であることを示した。次に、坂井氏は、山形大学が 2004 年より実施しているペルー南部海岸のナスカの地上絵に関する最新の研究成果を報告した。そして、地上絵の形態や分布状況、および利用状況の検討から、紀元前 400 年～16 世紀におよぶ地上絵の製作や利用に加えて、長期的な社会変化における地上絵のあり方の変化についての見解を提示した。続く、渡部氏は、ペルー北部で紀元前後～16 世紀にかけて栄えたカハマルカの社会に関する最新の調査成果を報告した。そして、ペルーの諸地方で展開したモチェやワリ、インカといった国家と称される社会との比較から、長期にわたって非国家社会であったカハマルカ社会の特徴とその持続性に関する見解を示した。最後に、佐々木氏は、ペルー中央南部高地のアヤクチョ県の祝祭における踊りであり、ユネスコの無形文化遺産にも登録されたハサミ踊りを中心に、現代のアンデス社会についての論考を示した。そして、祝祭におけるハサミ踊りの役割やその起源に関わる植民地期の史料を示したうえで、都市と村との関係や海外での事例から、ハサミ踊りの文化的・社会的位置づけが変化してきた状況を報告した。

シンポジウムの最後には、関雄二氏（国立民族学博物館教授）の司会によって、全パネリストが参加した総合討論がおこなわれた。限られた時間ではあったが、「終焉」や「研究成果の社会的還元」などを主題に、活発なディスカッションがおこなわれた。さらに、シンポジウム終了後には、本フォーラムの第二部「アンデス音楽の調べ」が催され、グルーポ・アルトゥラスによるフォルクローレの演奏が披露された。好天にもめぐまれ、参加者は 202 名で、大盛況のうちに閉幕となった。

■高校世界史教科書改訂に関する報告

鶴見英成（研究担当役員）

学習指導要領の改訂に伴い、平成25年度より高等学校の世界史教科書は大幅に改訂された内容となっている。従来の教科書におけるアメリカ大陸の古代文明の記述には質量ともに難があると、かねてより懸念の声が本会会員の中から上がっていたが、それが今回の改訂に反映されている。本報告にて、本会および会員による2013年度までの取り組みについて、通時的に概括する。なお過去の役員会・総会での審議・提言・報告の経緯について、本誌『古代アメリカ学会会報』バックナンバーを適宜引用する。

古代アメリカ学会第11回総会（2006年12月）にて八杉佳穂会員より、世界史教科書における古代アメリカ史の記述を、最新の研究成果を踏まえて増補改訂すべく会として働きかけてほしいとの要望が出され、役員会はこれを議事として検討することとした（会報21: 8)。しかし当該年度内に実質的な進展はなく、第12回総会（07年12月）にて青山和夫会員が再度提議した（会報23: 10)。これを受けて第13回総会（08年12月）では、役員会の下に「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下WG)」を発足させること、一般社会への学術情報普及を主目的として学会主催シンポジウムを開催することが提案・承認された（会報25: 8, 10)。WGは研究担当役員の青山会員（メソアメリカ考古学・マヤ文明学）を座長とし、高等学校教諭として授業実践の立場にある（cf. 会報31: 2-3）多々良穣会員（マヤ文明学）のほか、吉田栄人会員（マヤ民族学)、坂井正人会員（アンデス考古学)、井上幸孝会員（アステカ史）の計5名により速やかに組織された。

2009 年 6 月､古代アメリカ学会主催第 1 回公開シンポジウム「マヤ文明とアンデス文明の調査と国際協力」が開催された。同時期に WG は研究会を開いて問題の所在を論じ、①世界史教科書、②マスコミ報道、③研究成果の一般発信について短期・中期・長期的展望をとりまとめ、9 月に役員会に対し答申案を提出した。とくに具体的な誤記載を各教科書出版社に提示することが、具体的かつ有効な戦略であると位置づけられた（会報 27: 4)。この答申案を核にその後の知見を加えた報告・提言が会誌に投稿されている（青山ほか 2009)。

第 14 回総会（2009 年 12 月）にて、社会に対する積極的な情報発信と教科書記述の改善のため、会として現状を把握し情報を整理・共有するという方針が確認された。答申案提出をもって役割を終えた WG は「学術情報普及戦略班」へと改組され、具体的な活動を推進することになる（会報 27: 5, 7)。まず 12 年の教科書大幅改訂に向けて、10 年 8 月に出版社 8 社へ記載内容の修正案を送付し（会報 29: 9)、7 社分を会誌にて開示した（青山ほか 2010)。また科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表」（B）の助成を得て、第 2 回公開シンポジウム「マヤ・アンデス文明の謎と神秘のベールをはぐ」（10 年 10 月）を実施した（会報 29: 5-8, 9)。第 15 回総会（10 年 12 月）にて「戦略検討班」は、教科書修正案のフォローアップを継続しつつ事業を徐々に収束させる方針を示した（会報 29: 10, 15)。これ以降は会員個人・団体主体の活動へと移行したわけだが、各出版社の動向を学会としてフォローアップする体制は 13 年度まで維持された（会報 31: 5, 12-13, 会報 33: 10, 22)。

そして各社の新しい教科書が出揃った。改訂箇所の詳細および全体的展望については青山会員らの会誌投稿（青山ほか 2013）を参照されたい。2010年の修正案は各出版社において検討され、その結果適正な術語や正確な数値が使われるようになり、さらに最新の知見も反映されるなど、全体的に状況は好転したと評価されている。とくに「四大文明」という偏向した術語が姿を消したことは、日本人の古代文明観が今後大きく変化することを端的に予見させる。ただし改善の余地を含む表現がまだ散見されるほか、新たに盛り込まれた記述の中に不適切な表現が見られるケースもあり、継続的に改善を訴えていくことの重要性を執筆陣は主張している。なおこの投稿は科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」と基盤研究(B)「マヤ文明の政治経済組織の通時的変化に関する基礎的研究」（ともに平成21-25年度、青山和夫代表）の研究補助によるものであり、その協力によって本会も改訂版教科書の情報収集を果たした（会報35: 12, 25)。

以上のように、本稿においてこれまでの経緯を紹介し（会報35:13, 25-26）本会によるフォローアップ

の一つの区切りとする。しかし教科書のさらなる改善はもちろん、WGの提議したマスコミ報道や研究成果の一般発信についても、まだ課題は残っている。今後も本会会員が学術情報のさらなる普及拡充を牽引することが期待される。

なお、本件に関して発表された著作物は多数に上るが、教科書および学術情報普及にとくに主眼を置いた刊行物を参考のために挙げておく。

青山和夫
2000「新しい古代マヤ文明観から異文化理解を考える―“マヤの水晶ドクロ”のいかさま」『科学』70(3): 170-174.
2007『古代メソアメリカ文明―マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ.
2008「『真の世界史』を学ぶ：マヤ文明は洗練された『究極の石器の都市文明』」『日本学士院ニュースレター』1: 7.
2008「マヤ文明研究と『真の世界史』」『チャスキ』37: 6-14.
2009「マヤ文明における太陽と暦：『四大文明』だけではない『真の世界史』のために」『科学』79(12): 92-95.
2012『マヤ文明　密林に栄えた石器文化』岩波新書.
2012『“謎の文明”マヤの実像にせまる』NHK出版.

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・井関睦美・長谷川悦夫・嘉幡茂・松本雄一
2013「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか－新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史教科書の検証－」『古代アメリカ』16: 85-100.

青山和夫･坂井正人･井上幸孝･吉田栄人･多々良穣
2010「日本の歴史教育における先コロンブス期アメリカ大陸史とよりグローバルな「真の世界史」」『考古学研究』57(3):15-19.

青山和夫･多々良穣･坂井正人･井上幸孝･吉田栄人
2010「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」『古代アメリカ』13: 31-40.

青山和夫･吉田栄人･坂井正人･井上幸孝･多々良穣
2009「古代アメリカの学術情報の普及－高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善、研究成果の発信と還元－」『古代アメリカ』12: 95-103.

井上幸孝
2013「5-2 南北アメリカの先住民」『世界史 B 教授用指導書』pp.66-67, 実教出版.

多々良穣
2001「第 5 の古代文明」『歴史と地理』544: 16-26.
2005「高校生のマヤ･イメージとマヤ文明の授業実践」『歴史と地理』589: 17-25.
2011「高校生の古代アメリカ文明の理解に向けて」『ラテンアメリカ・カリブ研究』18: 34-42.

吉田栄人
2008「日本におけるマヤ・イメージの消費構造－高校生・大学生・放送大学生に対するアンケート調査からの一考察－」『古代アメリカ』9: 1-23.

事務局からのお知らせ

1. 第 19 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第 35 号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 19 回研究大会・総会を 2014 年 12 月 6 日（土）と 7 日（日）の 2 日間にわたって名古屋大学の野依記念学術交流館において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による後述の「2.第 19 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、すでに事務局から発送した郵送物に同封されておりますハガキにてご返信をお願いします（2014 年 10 月 1 日（水）消印有効）。また、12 月 6 日の総会終了後に懇親会を企画しておりますので、あわせてご出欠についてお知らせ下さい。

総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

記

古代アメリカ学会第 19 回研究大会・総会
１．日時：一日目　2014 年 12 月 6 日（土）
研究大会　13:00～17:00（予定）
総会　17:00～18:00（予定）
懇親会　18:30～（予定）
二日目　2014 年 12 月 7 日（日）
研究大会　09:00～12:00（予定）
（発表本数が多い場合は、二日目の午後の部もおこないます）
２．場所・会場：名古屋大学　野依記念学術交流館（名古屋市千種区不老町）

2. 第 19 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 19 回研究大会実行委員長
伊藤伸幸

会員より申請があった研究発表については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許諾の可否について通知いたします。

研究発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、返送用ハガキの「発表申請」におきまして「有」をマルで囲んでご返送下さい。

１．発表申請者（会員に限ります）
２．発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
３．発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
４．発表タイトル
５．研究発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
６．口頭発表者(実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります)
７．発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1-2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×40 行、横書き、余白は上 35 ㎜、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。
（＊発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします）

＊送付先：jssaa@sa.rwx.jp（学会事務局）
＊締切：2014 年 10 月 1 日（水）午前 10 時（メール必着）

審査結果については、10 月 15 日（水）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもおしらせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

＊参考　「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ(平成23年12月2日役員会決定)」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。
（内容）
(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。
(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。
（形式）
(1)（口頭発表をおこなうことができる者）
口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が

企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。

(2)（発表者および共同発表者の記載順）

発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることができる。

(3)（複数の口頭発表についての制限）

1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることができる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 17 号（2014 年 12 月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定・執筆細目（第 15 号以降に掲載の最新のもの）をよくお読みの上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。「論文」・「調査速報」・「書評」のいずれも随時募集しています。「論文」は査読（通常、原稿受領後 1～2 か月で査読終了予定）を終えたものから随時掲載が決まります。「調査研究速報」は 9 月 25 日までに届いたものを第 17 号の査読対象とします。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先：
井上幸孝（運営委員、会誌編集担当）
〒214-8580　川崎市多摩区東三田 2－1－1
専修大学文学部（10 号館研究室）
Tel. 044-900-0547　　Fax. 044-900-7848
E-mail　mailto:takaio@po.aianet.ne.jp

②会報「37 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など
　特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信
　最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介
　古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他
　会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス　hironorifukuhara@gmail.com
（会誌とは異なるのでご注意ください）
○投稿締切　11 月 28 日（金）
○発行予定　1 月上旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行　　口座番号：00180-1-358812
加入者名：古代アメリカ学会
三菱東京 UFJ 銀行　本厚木支店
口座番号：1761650(普)
口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2,000 円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

（事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

＜編集後記＞

「会員からの寄稿」では、嘉幡茂会員にメキシコの大学における大学教育を紹介いただきました。留学を考えている会員にとって、有用な情報だったと思います。

また特集「古代への接近法」では沼田晃一会員、杓谷茂樹会員、若林大我会員の 3 名から寄稿いただきました。先史学・考古学・歴史学の関連分野を専門とする本学会員が、「古代アメリカ」を射程に入れつつ、どのようなアプローチで研究を進めているのかについて、わかりやすくまとめられています。先史学・考古学・歴史学をフィールドとする会員にとっても発見の多い話だったのではないでしょうか。

本学会協力事業である 5 つの公開フォーラム・シンポジウムの報告は山本睦会員、高校世界史教科書改訂に関する報告及び、先日行われた第 3 回東日本部会研究懇談会は鶴見英成会員による報告です。

執筆者の皆様には、締め切りまでの時間がほとんどない中でご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。（福原）

発　行　古代アメリカ学会
発行日　2014 年 6 月 30 日
編　集　古代アメリカ学会　会報担当：福原 弘識
中川 渚
古代アメリカ学会事務局
〒338－8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部　井口欣也研究室気付
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/